青潮小

主体的に学ぶ子どもの育成

～問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを通して～

（３年計画の１年次）

校長　　小泉　孝一

１　研究主題について

本校では、教育目標である「たくましく　心美しく」の具現化のために、昨年度から「主体的に学ぶ子どもの育成」という主題で、全教科において研究を進めてきた。昨年度までの研究により、理科の授業では、導入場面で２つの事象を比較する場面を設定したこと、また、特別な教科道徳の授業では、アンケートの結果を踏まえた問題提示の工夫により、児童の課題解決意識を高めることができた。また、どの教科においても、見通しをもたせる手立てとして、写真や数値などの資料や既習事項の振り返り、ヒントカードなど工夫したことで、どの児童もおおよそ課題解決の見通しをもつことができた。しかし、児童が主体的に問いを見つけ、児童と教師、児童相互のやり取りの中での、問いの共有をすることに曖昧であったり、教師主導の展開になることもあったりするという課題が挙げられた。また、課題解決に向けて、効果的な意見交流の場が必要であると考えるが、意見交流のために書く活動の工夫や話す・聞く活動の工夫が必要であるという課題も挙げられた。

そこで、今年は、昨年度までの研究を踏まえ、また、新学習指導要領を受けて、問題解決的な学習を通して、児童が課題解決に向けて主体的に学ぶことができるよう、学ぶ意欲を高める課題提示や教材、発問の工夫、見通しをもたせ、解決に向けた場の設定の工夫をすることとした。このような研究をすることで児童が「なぜだろう。」から「分かりたい。知りたい。」という課題意識をもって学習に取り組む「主体的に学ぶ子どもの育成」に迫ることができると考えた。

今年度の学校目標は、「よさを生かし、主体的・自立的に取り組む子どもの育成」で、学びづくりの重点施策は、子どもたちの確かな学力の向上（基礎・基本の内容の定着）である。児童が自ら考えたい、調べてみたいと主体的に課題に取り組む授業を重ねることで学力を定着させていきたい。

２　研究のねらい

課題解決に向けて主体的に学ぶことができるようにするために、問いの共有ができる課題提示や見通し、解決に向けた場の設定をどのように工夫していけばよいかを、問題解決的な学習を取り入れた授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

「なぜだろう。」から「分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したか。」が明確になる課題解決するための手立てや場づくりの工夫をすることで、主体的に学ぶ子どもを育成できる。

４　研究の内容

(1) 児童が問題を発見し、主体的に問題解決にむかえるよう、教師のはたらきかけを工夫する。

（導入から課題設定まで）

・教材の工夫
・発問の工夫

(2) 見通し、解決に向けた場の設定の工夫

・書く活動の工夫
・話す・聞く活動の工夫

５　年間計画

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・授業の概要
６	３０	○第１回研究授業・協議（要請訪問　５学年　算数）授業者　教諭　尾形　和紀 題材名　「三角形・四角形の角」 助言者　八戸市総合教育センター副所長兼主任指導主事 松橋　祐哉　先生 ・様々な三角形の３つの角を１点に集める活動を行うことを通して、すべての三角形の内角の和が 180 度になることを理解する。
９	１	○第２回研究授業・協議（１学年　道徳）　授業者　教諭　嶋守　由紀 主題名　れいぎただしく　教材名「スポーツとおじぎ」 ・おじぎについて考える活動を通して、礼儀は心と形の両方が大事であることが分かる。
１１	２４	○第３回研究授業・協議（４学年　道徳）　授業者　教諭　加藤　愛理 主題名　正直に生きる　教材名「ぼくは MVP」 ・心情曲線を用いて正直について考える活動を通して、自分自身をごまかさずに生活していこうとする心情を育てる。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師　等
５	２７	・「問題解決的な授業づくり、主体的に取り組む態度の評価について」 講師　八戸市教育委員会　教育指導課副参事兼主任指導主事 日向端　聖　先生
７	１４	・救急法（AED 講習会・熱中症対策） 講師　八戸東消防署員
９	３	・１人１台端末の活用研修会 講師　八戸市総合教育センター　主任主導主事　大下　洋一　先生

６　研究の成果

(1) ・授業の導入場面で、揺さぶりをかけ、思考のズレを生む問いかけをすることで、児童が問題意識をもって取り組む姿がみられた。
・提案授業からいろいろな教科での「しかけ」を知ることができ、参考になった。
・課題を工夫し、児童の言葉を使ってめあてを引き出した授業を展開することで、学習に意欲的に取り組むことができた。

(2) ・他の児童の解決方法を発表させる場面を設けたことで、自力解決できない児童の参考となった。
・隣の人と話し合う、意見を聞き合う、ヒントコーナーを設けるなど場づくりの工夫で見通しをもって考える児童が増えた。

７　研究の課題

(1) ・児童の実態に合わせて、思考のズレを生じさせるような教師の働きかけを工夫する必要がある。
・考えることを苦手としている児童のため、考える場面の工夫が必要である。

(2) ・既習事項を基に考えをもつことができるようにするために、見通しだけではなく、考えを確実にするなどの工夫も必要である。

（記入者　　髙橋　恵）